

横浜市港湾局「横浜港における港湾労働者の実態と住宅事情」

——港湾労働者住宅等調査報告書——

和 泉 雄 三
(北海道立総合経済研究所)

I 調査方法

「横浜のドヤ街」——港湾労働といえば直ちに連想される言葉であろう。それ程住宅問題は港湾労働と密着した問題であった。むしろ「ハマのドヤ街」こそ、日本の港湾労働問題を集中的に表現した現象であったといつてよい。にも拘らず、その実態を系統的科学的に明らかにしたレポートは皆無であった。いう迄もなく、実態調査のむづかしさがそうさせたのである。問題は明らかであった。然し調査ができなかったのである。調査しようとする人は、暴力団、ボスに阻まれ、そしてそれ以上に労働者それ自体に調査を拒否される可能性があったのである。更に加えて、生活状態調査そのもののむづかしさが加わる。上記のレポートは正にこの緊急かつ困難な課題と取組んだ労作である。

タイプ刷83頁の小冊子であるが、その資料的意義は重大であつて、日本港湾経済・労働諸研究に、貢献する処が多いと思われる。

このレポートは横浜市の委嘱により、横浜港湾福利厚生協会が調査した結果をまとめたものであり、具体的には北見俊郎教授（関東学院大学）の手になるものである。調査時期は昭和40年2月15日から3月26日迄。調査方法はあらかじめ用意した個人調査票を個人に配布回収、これを集計分析するというやり方。常用労働者22,321人の現員数（横浜港湾福利厚生協会に属する139社——横浜港の港湾関係企業の90%以上——の40年1月現在の常用労働者数）に対し1万4千枚の調査票を配布し、4,166票を回収している。その内わけは船内982人、沿岸1,042人、はしけ1,059人、その他729人、

不詳354人、計4,166人。殆ど全部が男子。外に日雇に対し、同じ調査票を500人に配布、259枚(52%)を回収している。合計4,425人である。

この4,400人に対する個人調査というのは驚くべき数字である。通例の個人調査は200~300人程度がせいぜいなのであり、1千人をこすと大調査といわれる。それから見ると、この調査は超大規模にランクされるものといえる。まずこの1点に敬意を表する。それだけに調査票も簡単にせざるをえない。ただ、些か残念なのは、調査票は簡単でよいのだが、どうせやるのなら、はしけ、日雇各労働者については、やはり別個の調査票を作るべきであったということである。はしけは、船内居住、日雇はドヤ街居住という特殊問題をかかえているからである。

レポートは、第1に常用労働者、第2にはしけ労働者、第3に日雇労働者の3章にわかれる。各章共、第1節に基本的事項(性別、結婚の有無、年令、経験年数、前職、出身地、家族事情、就労事情——以上常用の場合。但しはしけも日雇も基本的には同じ内容)第2節に住居と生活環境(居住分布、住宅の種類、住宅規模、住宅への希望、通勤事情——以上常用の場合、但しはしけも日雇も同じ内容)第3節に家庭経済的事情(家族構成、収入、家賃、生活費構成、生活意見——同前——)の3節にわかれる。各節共、懇切な解説が加えられる。それも単なる解説でなく、昭和30年、35年の状態(その頃他調査報告を引用しつつ)と比較したり、あるいは一般日雇等、同種労働者と比較したりするなど、比較検討を行っている。

II 調査内容

1 常用労働者

139社、計4,166人の常用労働者が対象となっているが、そのうちの85%が男子で女子は0.9%にすぎない。既婚者は52.8%、未婚者は20.7%、年令は31~50才の壮年層が56%、30才未満の青年が31.1%、50才以上の老年層が11.9%と、壮・老年が非常に多い。経験年数は5年以上の熟練労働者が61%と過半数を占める。30年調査では逆に5年未満の半・不熟練層が66.1%であった。前職は非常に多岐にわたって統一性に欠ける。出身地も全国にわたる。既婚者でも妻子と同居していない人も多い。住居は「港湾近接の市街地に集積」しているが、その理由の多くは「通勤に便利だから。」住居は自・借家と曲りなりに1家を構えている人が40%と多く、間借り30%(これは

簡易宿泊所、通称ドヤではないとのこと）を加えると、とも角常用労働者の住宅事情は一般労働者とさして変らない。但し出身地が全国にわたっている割に会社の寮、住宅が少く、僅かに6%に止まる。もっとも1戸を構えるといっても、50%の人が6帖以下の1間に押しこめられている（4.5帖1間の人だけで24%の多きに達する）事情では、これは「住宅」などといえるものではなさそうである。世帯人員とタタミ数（住宅規模）との相関々係が表示されていないのははっきりしたことはわからぬが、住宅不足という問題点は十分指摘しえたようである。当然住居についての希望が表明されるが、世帯持ちで10坪～14坪程度の広さを80%の人が希望するという謙虚さ。間数は2～3室を希望している。出勤は朝の6時半～7時半、帰宅は午後6時～7時半で通勤所要時間は1時間以内、バス、市電利用というのが大部分。月収は3～5万円が81%で、月給者43.5%、月給・日給が33.6%と大部分が月給制で、日給者は18%にすぎない。比較的収入が高いが、家賃も又高い。月に5千円～8千円という人が68%である。そのため家をつくるために貯金をしている人も相当ある。エンゲル係数は船内労働者で2人世帯48.5%、3人世帯50%、4人世帯58.6%と異常に高い。これは生活苦を物語る。このように常用労働者の場合は、何も一般労働者と変らない貧しいながら堅実な生活を営んでいる。暴力や封建的な諸関係とどういつつながりがあるかの調査はされていないが、以上のような諸事情からみる限り、何にも関係はなさそうで、ただ浮んでくるのは貧困と住宅不足という一般的問題だけである。

2 はしけ労働者

1,263人で、全員が常用、従って前記常用労働者4,166人中に含まれている。住宅調査に関し、特にこの1,263人を抽出して1章を設けた理由は、その20.6%が船内居住者であるということと思うが、調査票に、船内居住者欄を設けていないので、問題が浮上ってこない結果となった。もう1つ問題がある。はしけ労働者といえば直ちに1隻船主、船主＝労働者を想起する。これは本質的には自営業者であると思われるが、このはしけ所有関係が明らかにされていなかった。こういうのはぜいたくな歎きであろうか？

年令をみると50才以上をこすのは僅か21人、30才未満が298人、30～49才が652人、50才以上21人、計970人、不明293人、合計1,263人。つまり青壮年で占められる。壮年層が多いのは前章の常用一般の傾向と同じである。タタミ数などはほぼ常用と同じ

だが、月収はやや多く、4万円以上が58%を占める。家賃は5千円～8千円台が67%と過半を占めるのも常用一般と変わらない。

このはしけ労働者のケースは、前記の2点について調査項目を設けていないのが欠点であった。従って、はしけの傾向は常用一般の傾向と殆ど同じになってしまい、特段に特殊性を発見することができなかった。対象数が少いので常用一般に埋没してしまった。資料でみる限り、給料が高いということから、はしけ労働者は港湾労働者全体の中で最上位に位する人々であるという印象しかうけない。この事が、労働組合運動や、社会意識とどのような関係をもつか、その解答は発見できないのであるが、然し、はしけ労働者が最上位層の労働者群であると規定する事が、労働組合運動、特に全港湾の横浜における組織形態、運動の方向と、何らかの関係があるかもしれないということは考えられる。何れにせよ、折角特別の1章を設けられたにしては、収獲が少かったと思われる。

3 日雇労働者

58頁から78頁迄20頁にわたる調査結果はこのレポートを通じさん然と光っている。259人の男子日雇が対象となっているが、これだけの回収率を生んだのは、調査員の熱意の賜物であって、敬意を表する。「52%の調査回収も、日雇労働者の「たまり」に入りこんで個々に調査目的の理解と協力ををしてもらった結果であった」(P.56)と書かれているが、私にいわせれば、日雇労働者の協力以上に、調査員の情熱と努力を特筆したいのである。これは全く調査マンでなければわからぬ苦勞である。

又、折角調査票に記入する気持になったにしても十分には記入して貰えなかったのは当然予想されるところで、故に「別途聞込をはじめ、他の面での必要な調査資料の収集を行って補足した」(P.56)。

年令は30才未満 17.2%、31～50才 65%、51才以上 10%と青壮年が多い。然し既婚者は32.5%と少く、多くが単身者であった。経験年数は常用程ではないが、3年以上の熟、半熟練者が大部分である。出身地は全国にまたがり、前職も、工員、土工、農夫が多いとはいえ、会社員、技師なども相当あり、各階層、職種にわたる。「殆ど一定地域に密集」して居住しているが、間借りが49%、寮住宅が21.4%と多い。この間借りというのが常用と違い簡易宿泊所(ドヤ)のケースが多いと推定されている。もっとも、簡易宿泊所(ドヤ)居住者を特掲していないのではつきりしないが……。

これは調査票整理過程で他と仕訳できたのではないだろうか？仕訳して特掲して頂けたら……と惜しまれる。1人当たりタタミ数は平均2.4帖。住宅の希望欄に記入してくれた人のうち世帯もちが93人いるが、その全部が6帖乃至11帖程度のスペースを希望しているのは印象的であった。どんなに狭くともよい、とも角ドヤを抜け出たいという意思をあらわしたものと解されるからである。

単身者は独身アパートと簡易宿泊所（ドヤ）希望とで2分されるが、この後者は、世帯持ちのケースと全く逆に救いのない絶望を意味している。この、青壮年労働者を絶望とあきらめに追いつける1つの原因は、恐るべき住居事情に迫りうちをかける「家賃」の高さであろう。タタミ1帖分が大体100～110円位とのこと。月に4千円～6千円が21%、6千円～8千円が38%で、4千円以上が住だけにとられている。

出勤は午前6時迄、帰宅は午後5時半～7時。月収は2万円迄31%、2万5千円迄28.7%、3万円迄15%、計75%と、大部分が3万円以下で、1日当たり収入1,200円と推定される。その支出構成をみると、某労働者の場合、宿代300円、飲食費600円、タバコその他200円、交通雑費100円、計1,200円。要するに食って寝てチョンである。衣類は「着捨てる」。「洗濯、修理は試みない例が多い」（P.76）

76頁に指摘されているように「その日暮しでは常用化への希望をもっても月給による生活体制をたてるために、1ヶ月間の生活費と支えがないためそれも不可能である」ことが、このドヤ街脱出を阻む経済的障害なのである。家賃の高さに重ねて、「宿泊街における物価が予想をうらぎるほどの高価な食糧その他生活必需品をうっている現状」（P.73）が労働者をドヤにがっしりと結びつけている。これは、もはや19世紀初頭資本主義初期の労働事情ではないか。スウェーディング、システムである。このドヤの経営者は、寿町の70軒の例では、韓国人40人、朝鮮人14人で日本人は僅か3人にすぎないという。これは問題である。外国人のために、日本人がかくも苦しめられる理由はないではないか。然しかくも絶望的な状態に追いこまれているとはいえ、ここに描かれた労働者の状態は断じてレンペンプロレタリアートの像ではない。朝早くから、夜おそく迄薄給にめげず、衣住になやみつつ勤勉に働く前記の状況にかかわらず、28%の人々が乏しいサイフをはたいて、家をもつため貯金をしていることがそれを証明する。

Ⅲ 批判・感想

調査技術の上からいって、はしけ、日雇労働者を特別調査して頂けなかったことが残念であった。4,400 人もの人々を調査したのだから、非常な大調査であったといわざるをえないし、その点では、絶大の敬意を払うにやぶさかではないが、百尺竿頭 1 歩を進めて貰いたかった。

ここに住宅問題の調査を通じて浮び上った横浜港湾労働者の像は、朝早くから夜おそく迄あらゆる困苦にめげずコツコツと勤勉に働く真面目な人々ということである。低賃金、通称ドヤと蔑視される狭くて汚い住居（家族と別れ別れになる程の）、重筋労働、要するに典型的なチープ・レーバーである。そしてこのチープ・レーバーを克服し、しばしば絶望に迄追いこまれつつも、ささやかな住いと乏しいながら安定した生活を望んで働いている真面目な労働者の姿である。誰が彼らを軽蔑しえようか。

この人々を絶望に追いこみ、強制的夫婦別れを余儀なくさせているのは、決して彼らの怠惰でもなければ、「質」の悪さでもない、単なる客観的経済諸条件であることは明白ではないか。

港運会社、この調査を意図された横浜市当局のなすべき仕事は数多いといわざるをえない。

1 日も早く彼らを救うべく住宅対策を立て、実施されることを望んでペンを置く。

（昭和41. 4. 6）

原レポートの参考文献

運輸省港湾局港政課「港運統計資料」昭和38年

木下陽吉氏「寿町、松影町、長者町 1 丁目に存在する簡易宿泊所街及び周辺の実態概要（Ⅰ）」埋地民生委員協議会、1964年12月

神奈川県労働統計調査主任連絡協議会「京浜港における労働者の生態」昭和30年10月

横浜港厚生協会「横浜港湾作業員の住宅事情調査報告書」昭和35年 2 月

喜多村昌次郎氏「港湾労働の構造と変動」1964年、海文堂

神奈川県労働部、神奈川県労働福祉協会、「日雇労働者生活実態調査報告書」昭和37年11月実施

（B 5 版 昭和40年12月発行 横浜市港湾局〔非売品〕）